

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 6月16日 10:13AM 更新

[日経平均・TOPIX]

【当面の想定レンジ】(日経平均) 50,000~70,000 円
(TOPIX) 3400~4100

[NY ダウ・S&P500]

【当面の想定レンジ】(NY ダウ) 45,000~52,000 ドル
(S&P500) 6300~7700

[ナスダック 100]

【当面の想定レンジ】(ナスダック 100) 23,500~30,800
(ナスダック総合) 20,700~27,200

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 140.000~160.000 円

[ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 95.000~100.650

エリオット波動とは

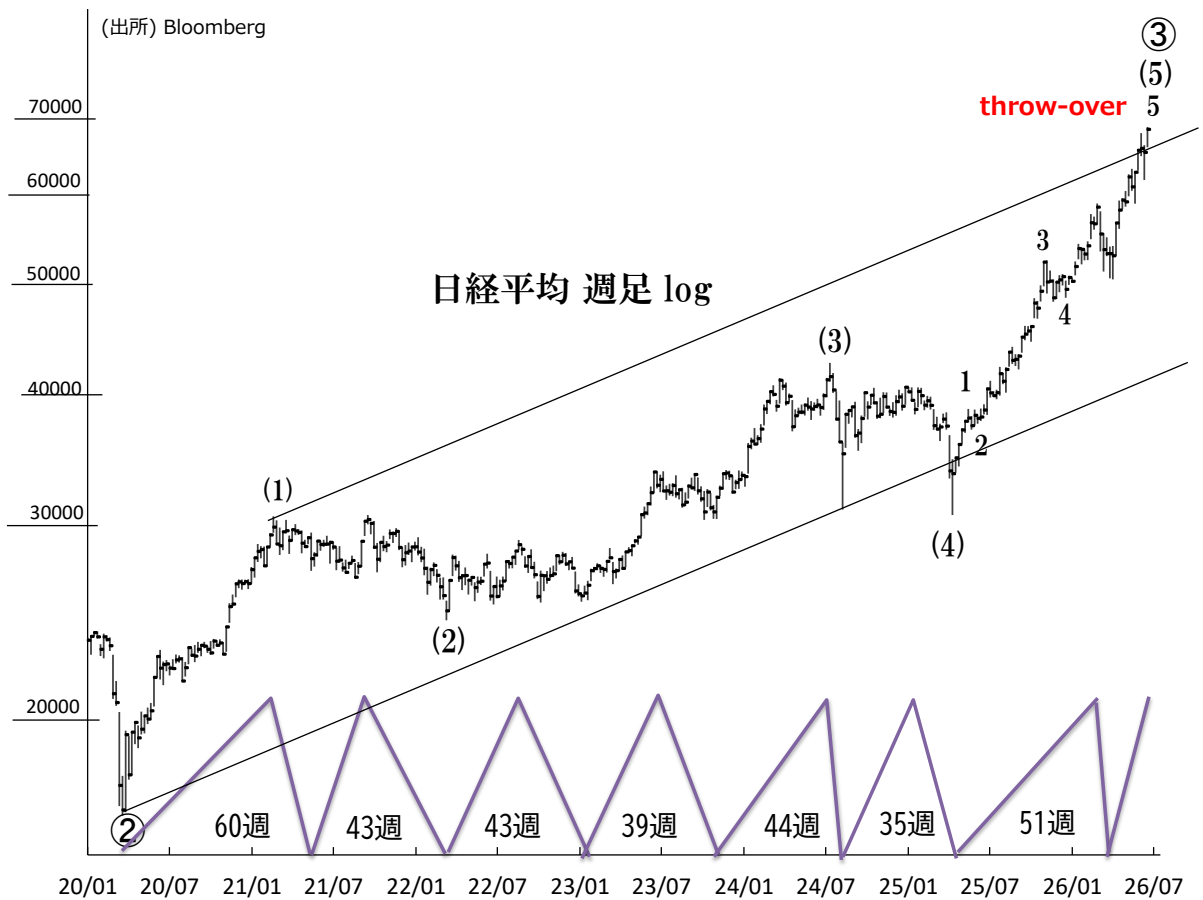
株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は5つの上昇波と3つの下降波(合計8つの波)で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均・TOPIX



【週足 エリオット波動分析】

週開け 15 日の日経平均は、驚異的な上昇(歴代 2 位の上げ幅)となり最高値を更新しました。この日は一時 69,682 円まで上昇、初の 7 万円台が目前となりました。

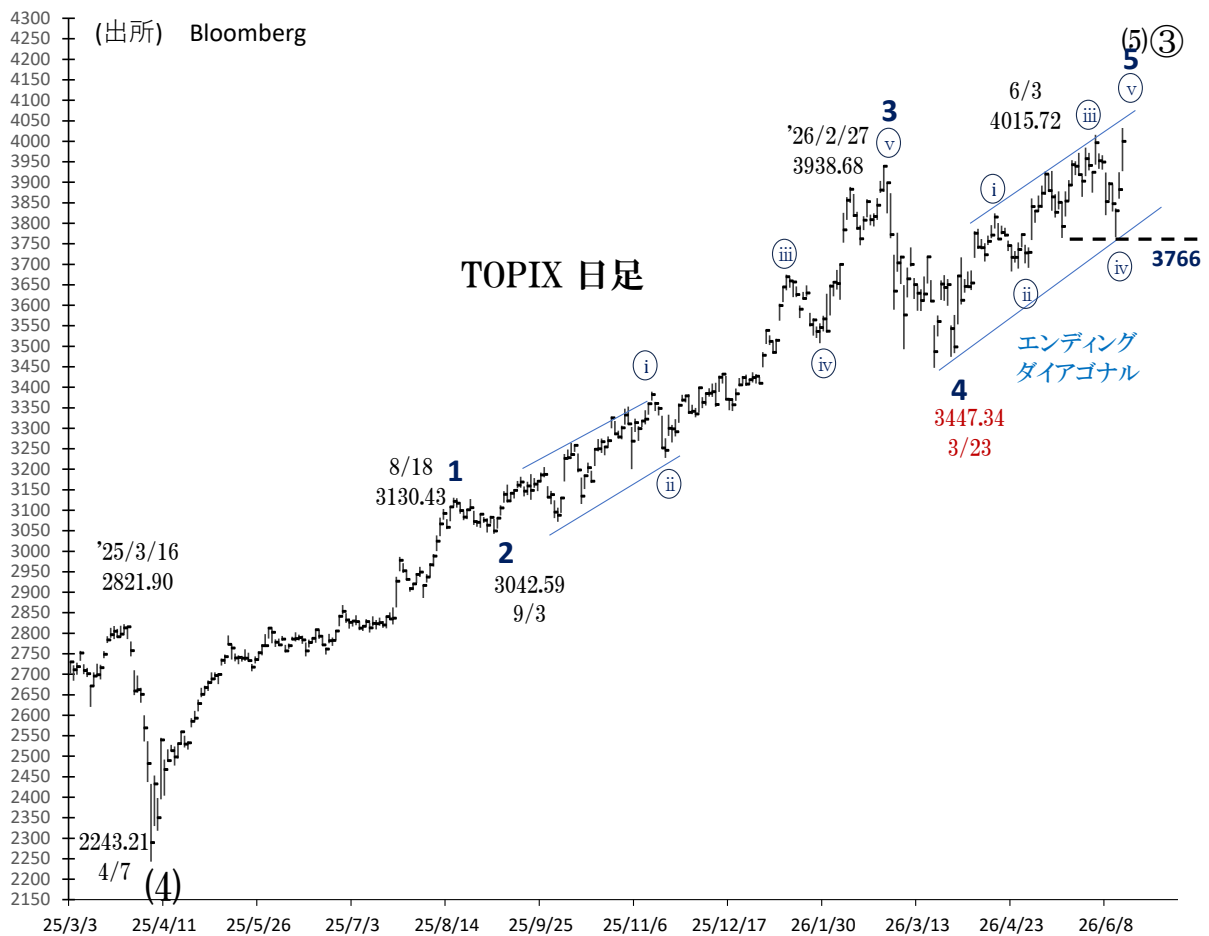
予想以上に強い展開が続いており、短期的な波動カウント修正は必要ですが、今がプライマリー第③波の終盤にあるという見方は変わりません。ひとたび④波の調整に入れば、それは高値から 38%~50% の下落となるでしょう。

3 月末からの週次サイクル(※)は、弱気型「レフト・トランスレーション(右肩下がり)」になるとみられ、サイクルの前半で天井を付けるでしょう。

現行サイクル始点の 3 月 31 日週から、今週は 12 週目に入りました。フィボナッチ 55 日目となるのは 6 月 22 日ですが、それは現行サイクル 13 週目(6 月第 4 週・6/22-26)にも当たります。今週から来週は、③波天井を示現するタイミングとして注目度は高いといえます。

高値示現後は、年末~来年 3 月のサイクル終点に向け株価は下落基調を迎えるでしょう。

(※)週次サイクル期間(2020 年以降の補正後)は 45 週±8 週(37 週~53 週)。サイクルの高値から安値まで、下げ率は 10%~26%(平均 17%)。

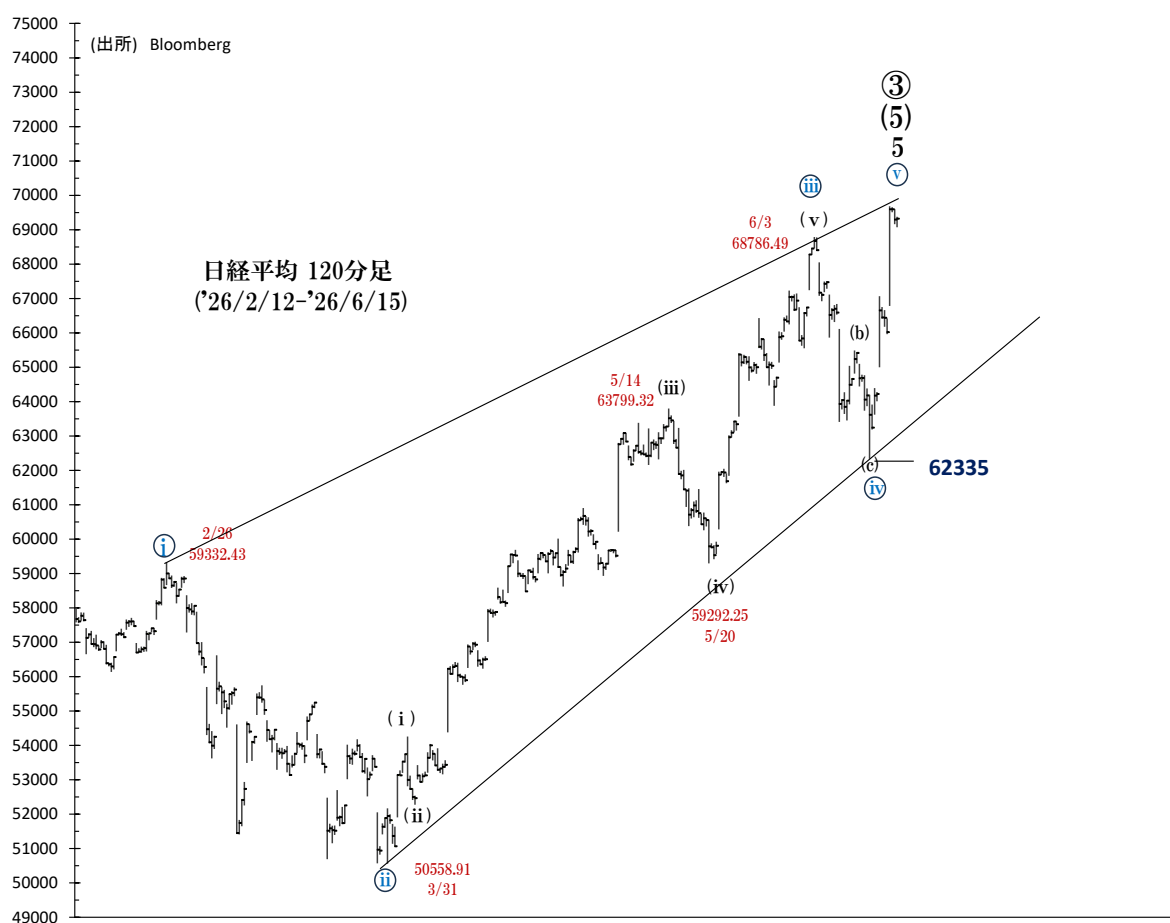


[TOPIX]

6月15日には一時4032まで上昇、最高値を更新しました。3月安値(3447)以来の「エンディング・ダイアゴナル」(転換パターン)から下入れ開始とみていましたが、誤りでした。

3月安値からの第5波(ダイアゴナル)はまだ続いており、3766(6/11安値)からの上昇は、マルv波に位置付けられます。このマルv波完成を以て、コロナショック底から6年余り続いた強気トレンドも完成し、プライマリー④波の調整入りとなるでしょう。3766を割るとマルv波終了の合図となり、当面は3447(ダイアゴナル始点)に向けた動きが想定されます。

プライマリー④波の調整規模は、プライマリー①波(2018年1月~20年3月)の下げ率(37.2%)と同等か、それ以上の大きさになると思われます。



[日経平均]

6月15日には6月3日高値(68,786円)を上回り、最高値を更新しました(高値は69,682円)。従来3月からの上昇をマイナー級第5波としていましたが改めます。

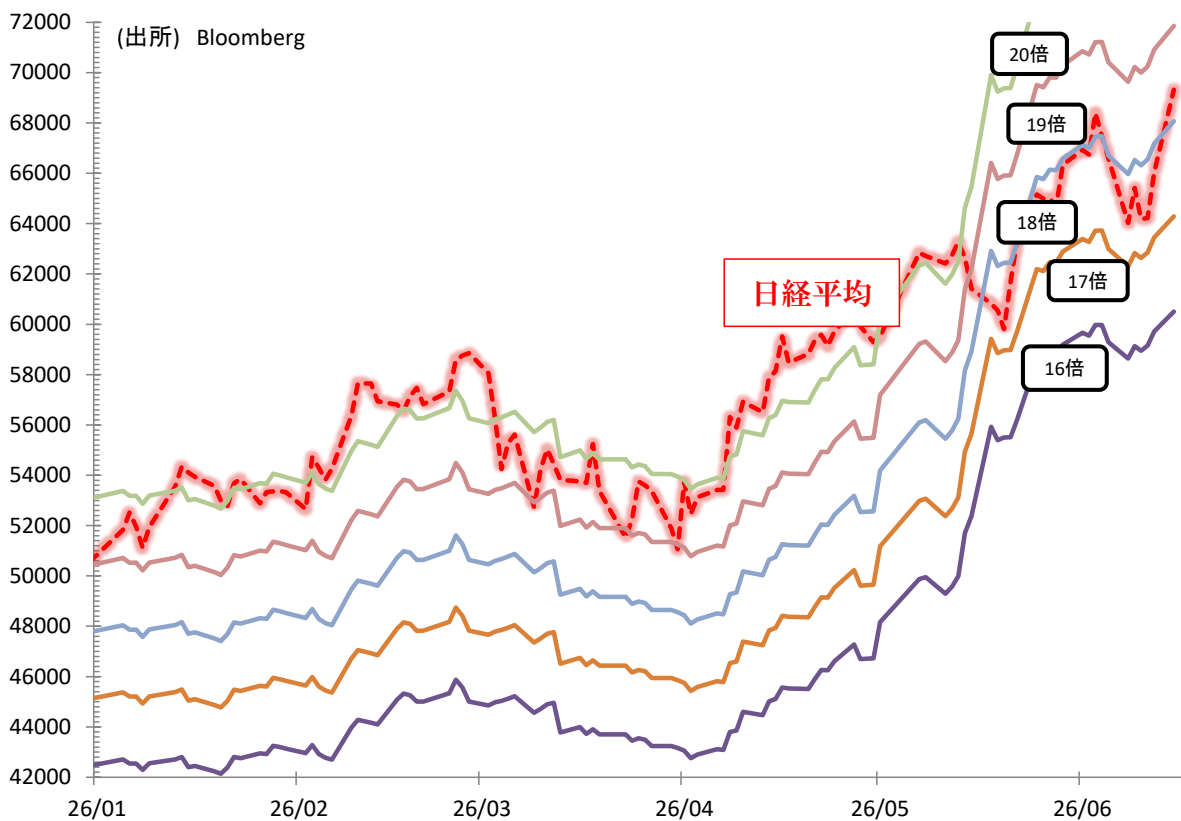
修正後のカウントでは、62,335円(6/11安値)からをマイニュート級のマルv波とします。その完成を以て、2020年3月底からのプライマリー③波も完了します。

足元の日経平均は、7万円を試す局面を迎えています。

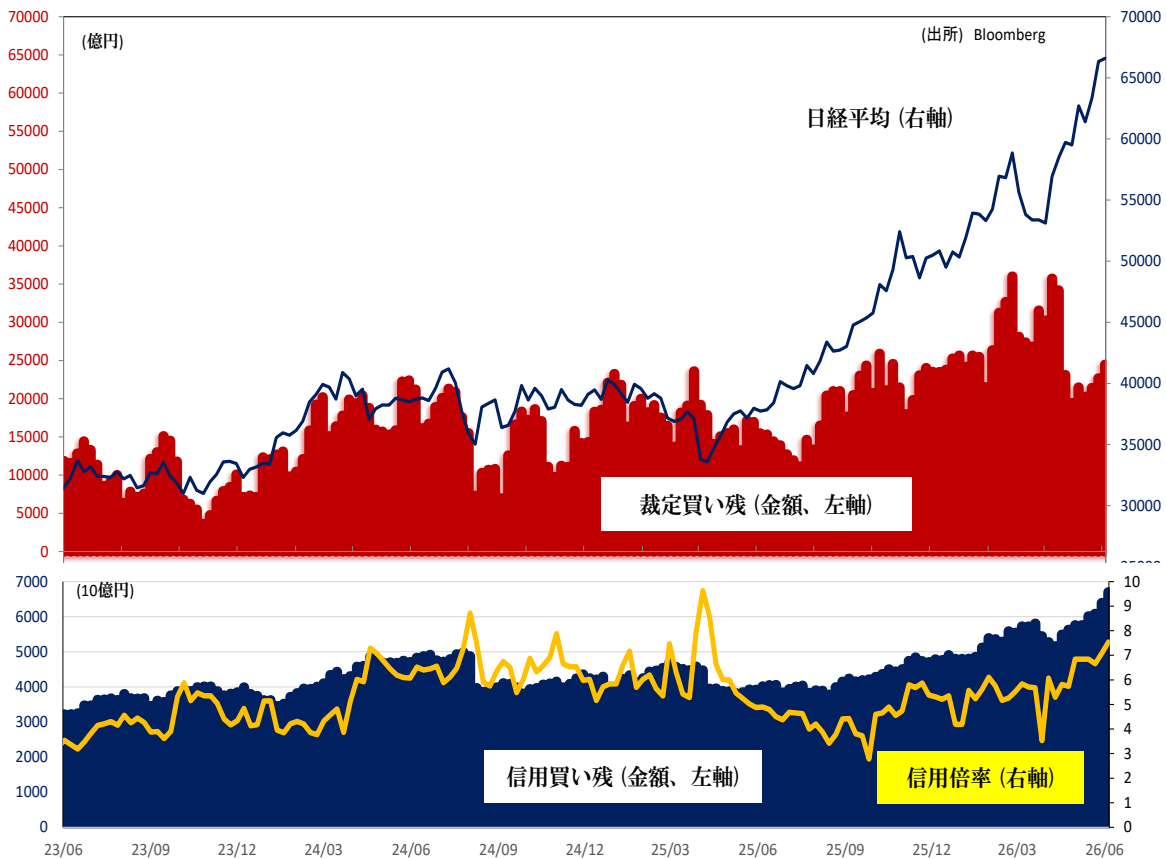
アベノミクス以降でみると、2万円から3万円への大台替わりまで5年10カ月、4万円まで3年1カ月かかりましたが、5万円まで1年7カ月、6万円までは半年足らずと、大台替わりのペースが加速しています。初めて6万円を付けた今年4月24日から2カ月も経っていませんが、今にも7万円を付けそうな勢いは、市場が2000年ITバブル当時のような狂乱状態にある証左でしょう。

予想PER別の日経平均水準]

6月15日の日経平均予想PERは18.33倍、予想EPSは3781円に上昇し、過去最高を更新しました。なお2011年以降、日経平均予想EPS増加の約80%は、「円安効果」で説明できます。



[裁定買い残と信用買い残] (6月5日時点)



NYダウ・S&P500



【NY ダウ 30 週足 エリオット波動長期分析】

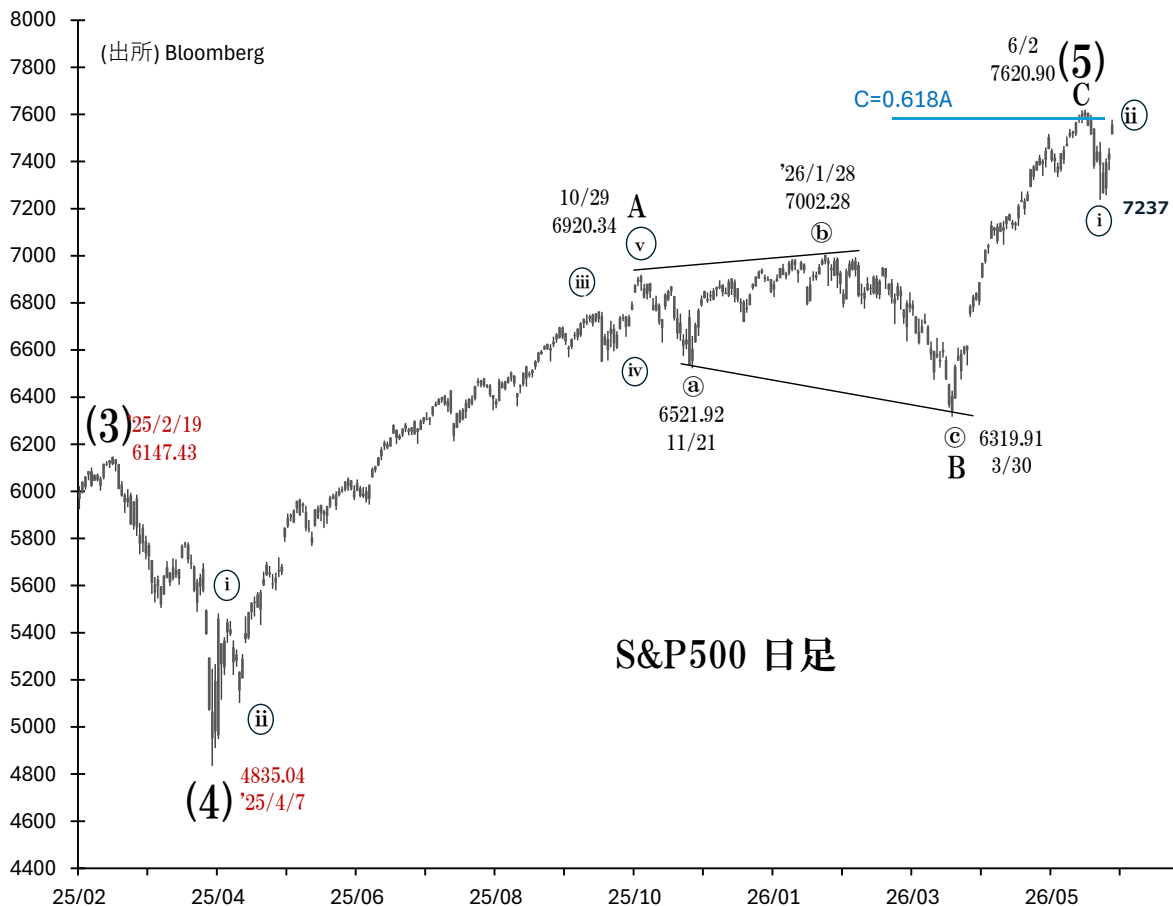
2020 年底を起点とするプライマリー⑤波は「エンディング・ダイアゴナル」(強気相場の最後に現れる転換パターン)を形成しており、その完了は近いでしょう。

ダイアゴナル上限(50,138ドル)を週末値で割り込むと、スローオーバー(throw-over)が確認され、それは天井打ちの最初のサインです。

通算 6 年余りの天井パターンが完成すると、その後 2~3 年の内に NY ダウはパターン開始点(18,213ドル)へ向けて下げる可能性があります。

【NY ダウ 30 日足 エリオット波動分析】

6 月 15 日は一時 51,945ドルと最高値を更新しましたが、この高値更新は S&P500 からは確認されません。この日のローソク足は比較的長い上ヒゲを持っており、少なくとも目先のピークになる可能性はあります。49,909ドル(6/10 安値)を下回ると、調整入りのリスクが高まります。



【S&P500 日足 エリオット波動分析】

6 月 2 日高値の 7620 は、A 波と C 波が黄金比になる水準[7605]を満たすものであり、ピークアウトとなっておかしくありません。

6 月 15 日には一時 7577 まで上昇し、2 日の高値に迫っています。7237(6/9 安値)からの上昇がリバウンドに過ぎないなら、目的にもマル iii 波の下落がスタートするはずです。

一方、7620 を上回る動きとなれば、3 月末からの上昇は継続していることとなります。

SOX 指数は、6 月 15 日に最高値を更新しました。6 月 3 日の天井パターン「カラカサ」は、転換を暗示してはいましたが、その効果は限定的でした。

3 月 30 日安値から 6 月 15 日まで 53 営業日、この間の上昇率は 97.6%と狂乱相場が続きます。の 61.8%戻し水準に一致します。この付近でリバウンドが完了する否か、注目されます。



Bloomberg マグニフィセント7 インデックス

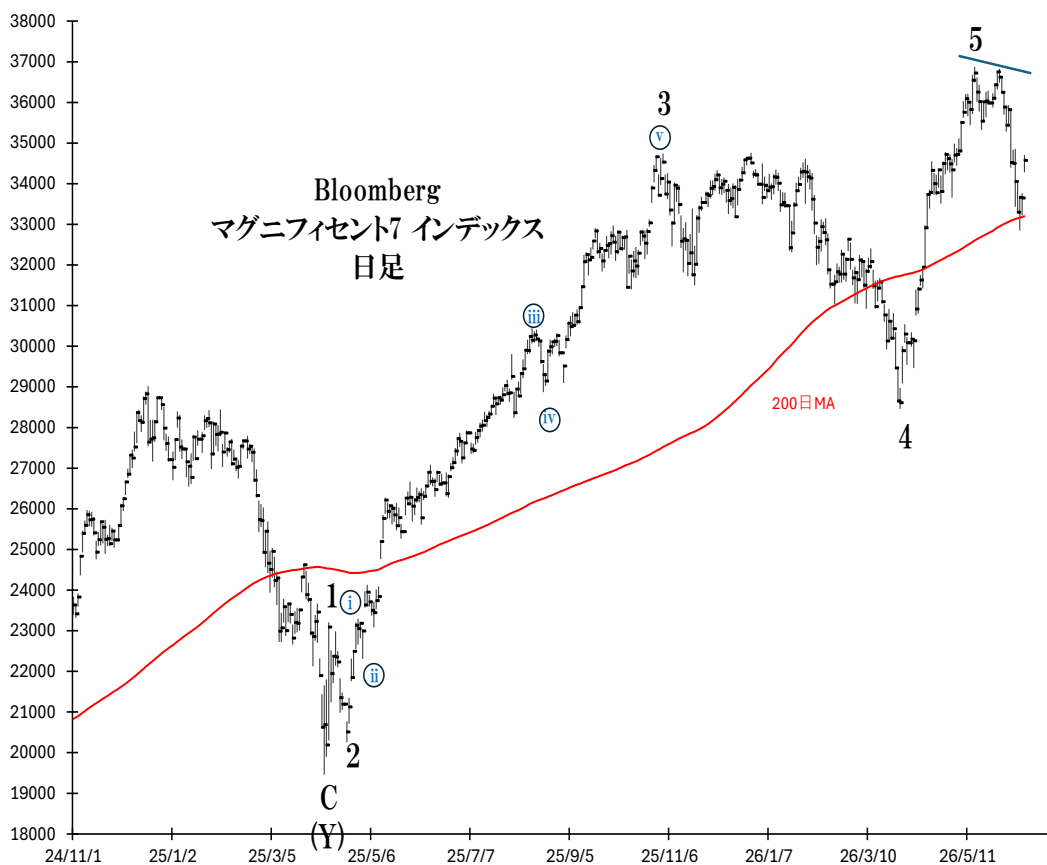
この指数が最高値を付けたのは 5 月 14 日です。それは他の主要指数より先行して高値を付けており、重要な天井パターン(未確認)とみることができます。

5 月高値から約 11%下げた後、足元は 200 日 MA 付近から反発しています。この先 200 日 MA を割り込むと、下げ基調が強まるでしょう。

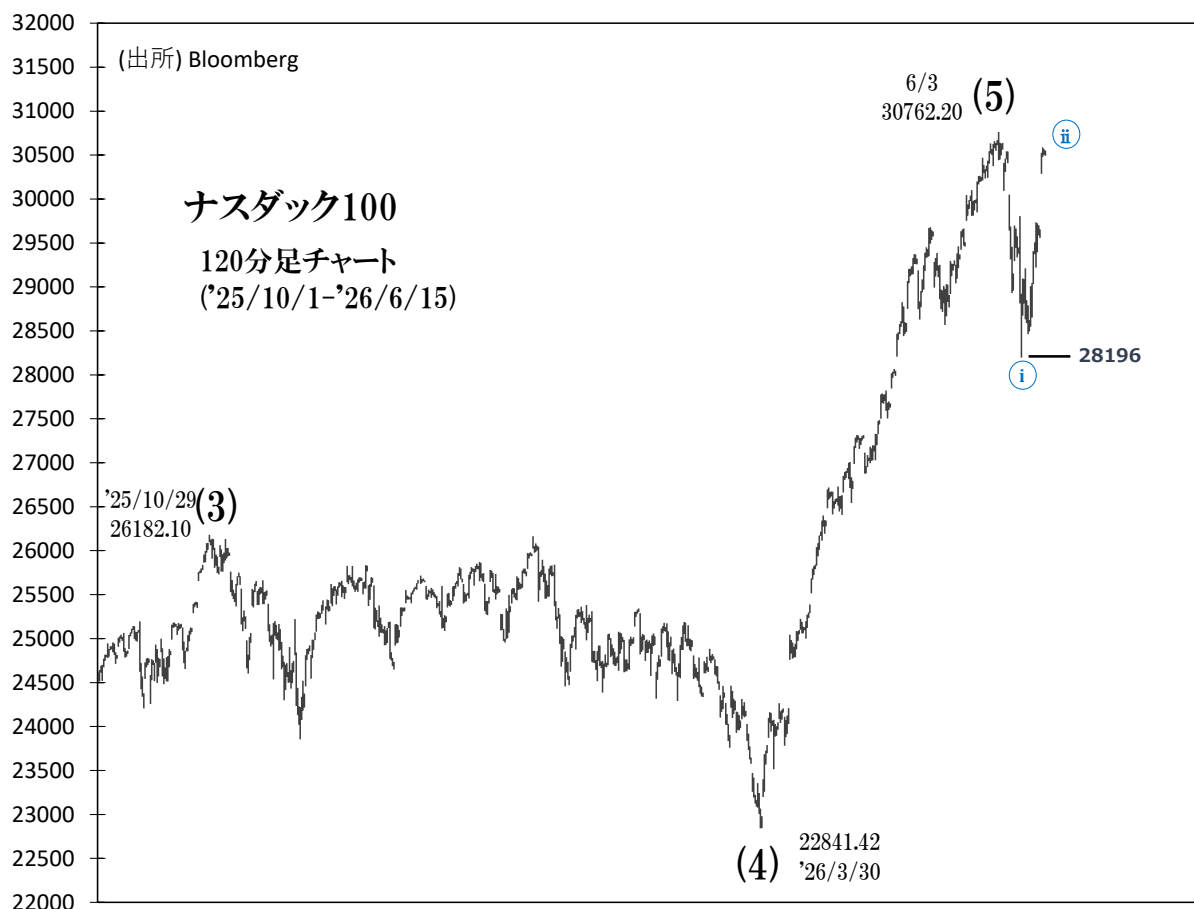
[ダウ輸送株平均] 第2波リバウンド



[マグニフィセント7] 200日 MA 付近から反発



ナスダック 100



【ナスダック 100 時間足 エリオット波動分析】

6月15日にはマドを空けて上昇し、30,762(6/3 高値)に迫りました(高値 30,587)。

28,196(6/10 安値)からが、マル ii 波によるリバウンドであるなら、目先的にもマル iii 波の下落が始まり、早々に 28,196 を割り込むでしょう。

一方、高値を更新する場合は別の波動カウントが必要になります。

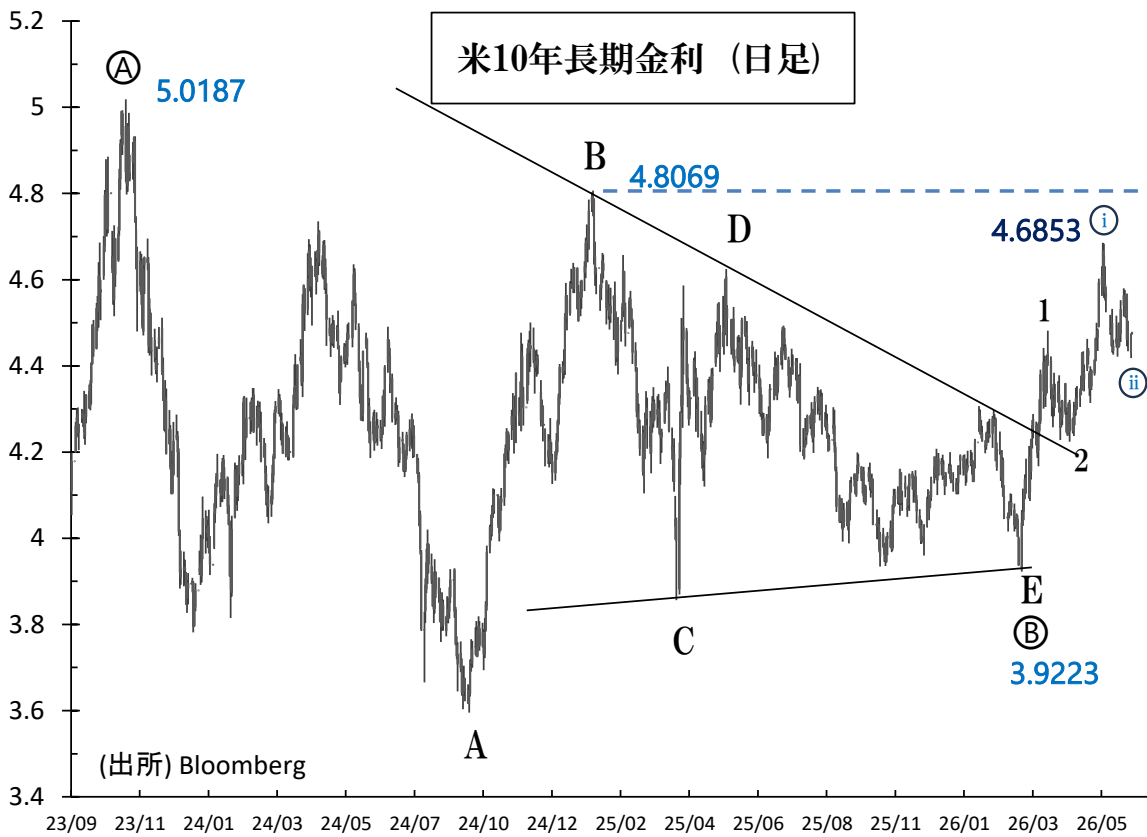
米 10 年長期金利は、今年 3 月の 3.9223%を起点とする◎波の金利上昇に入っています。

◎波は 23 年 10 月のⒶ波トップ=5.0187%を大きく上回る展開となるでしょう。

◎波の金利上昇は、今後数年続くと予想しますが、これは、景気悪化に関わらず物価と長期金利が上昇する「スタグフレーション」を示唆するものです。

この見方通り金利上昇が続いていけば、AI・半導体株のバリュエーションは低下し、株価は大きく下落するでしょう。

[米 10 年長期金利] 5.02%を上回る展開へ



米ドル/円



【月足・エリオット波動分析】

2011年～24年のドル/円上昇は「ダブル・ジグザグ(W-X-Y)」です。24年7月の161.938円からは、(X)波のドル安・円高が展開中とみられ、それは2028年まで続くでしょう。

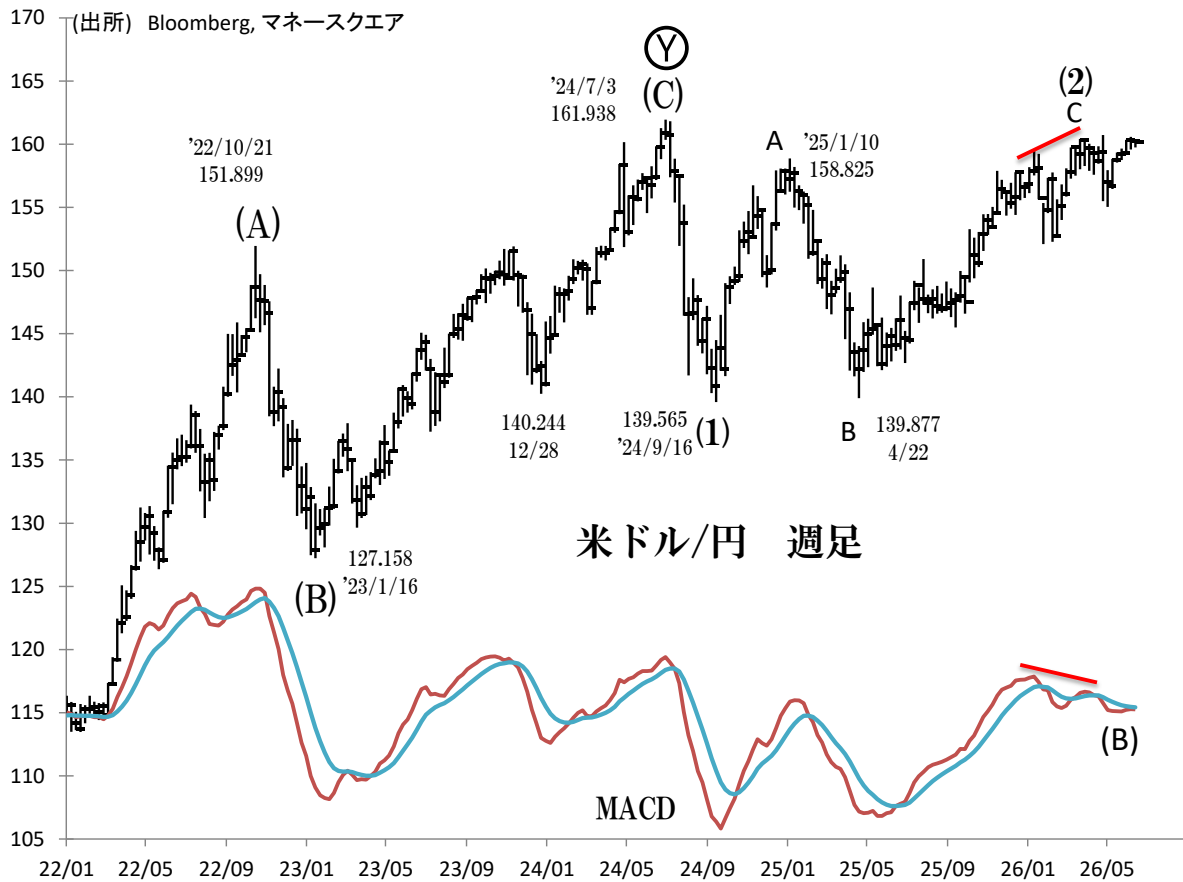
日米実質金利差から導かれる米ドル/円(以下、ドル/円)の水準は、現在1ドル=142-143円です。足元の日本円は金利差からみた妥当な水準より、極端な過小評価が続いています。

さらには、日本が「金利ある世界」に入った一方で、実質実効円レートは今なお史上最安値圏にあります。

このような「超円安」を筆者は「円安バブル」とみており、それは今後いつ弾けてもおかしくありません。

「失われた20年≒金利なき世界」では、円売りで調達した資金を様々なアセットに投資する円キャリー取引(※)が世界の潮流でした。しかし「金利ある世界」では、円キャリー取引の巻き戻し(円買い戻し)が進むと共に、市場ボラティリティが急上昇するリスクに留意すべきでしょう。

(※)BIS(国際決済銀行)によると世界の円キャリー取引規模は40兆円程度とされます。



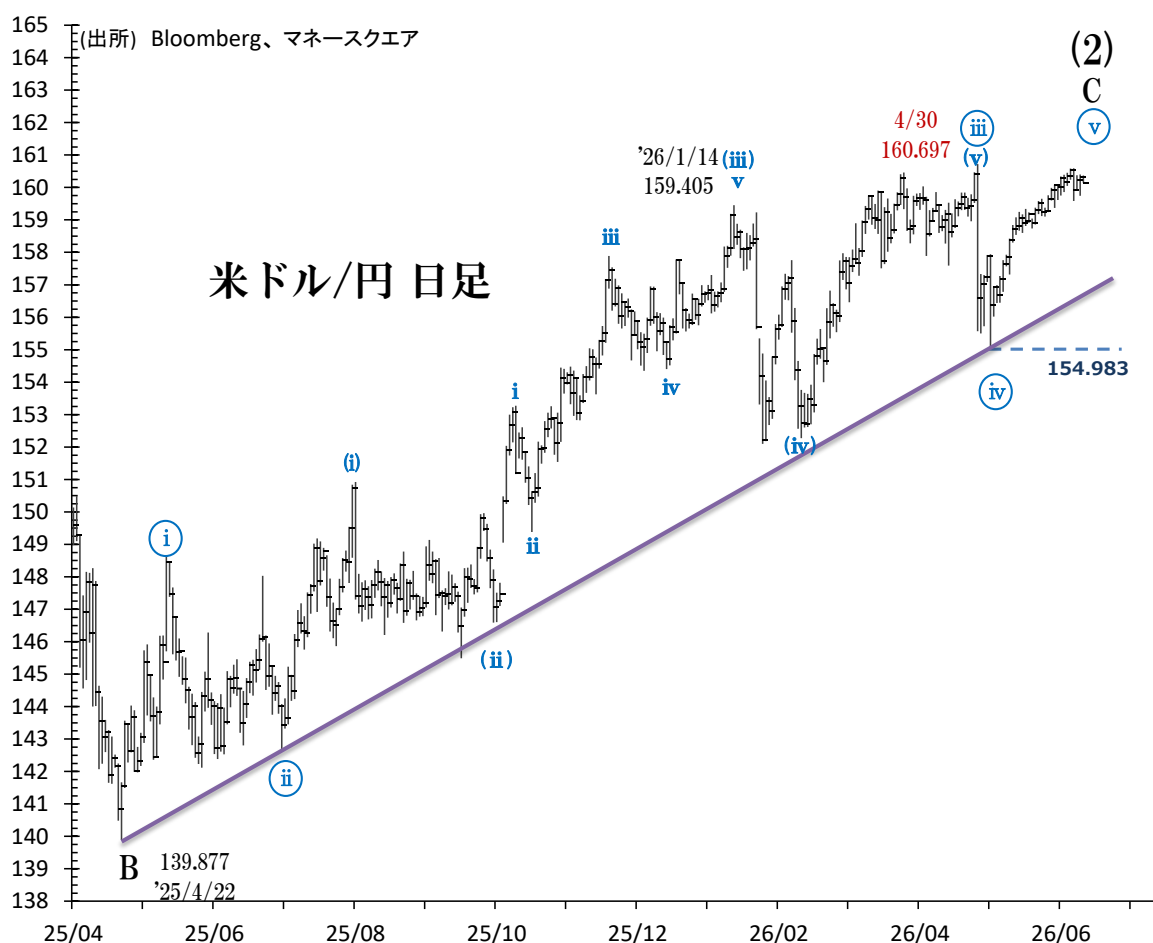
【週足 エリオット波動分析】

24年9月(139.565円)からの第(2)波「フラット(A-B-C)」は終わったか、終わりつつあります。次に想定されるのは第(3)波のドル安・円高です。

第(3)波のスケールは、第(1)波の 1.618 倍～2 倍になるとみるのが適当です。

もっとも、アナロジー分析からの「7月～8月にかけて140円処への急激な円高」という見立ては相当に難しくなったと思われます。

6月16日の日銀利上げは、今後の見通しにとり試金石となるでしょう。



【日足 エリオット波動分析】

第(2)波中 C 波の上昇が 25 年 4 月(139.877 円)から展開中とみられます。それは 5 つの波(マル i~マル v)で構成されます。

154.983 円(5/6)からはマル v 波に位置付けられます。マル v 波は順当に 160.697 円を上回るか、あるいは 160.697 円を抜けずに「切り捨てられた第 5 波(truncation)」になるかもしれません。

金利差からのドル/円推計値

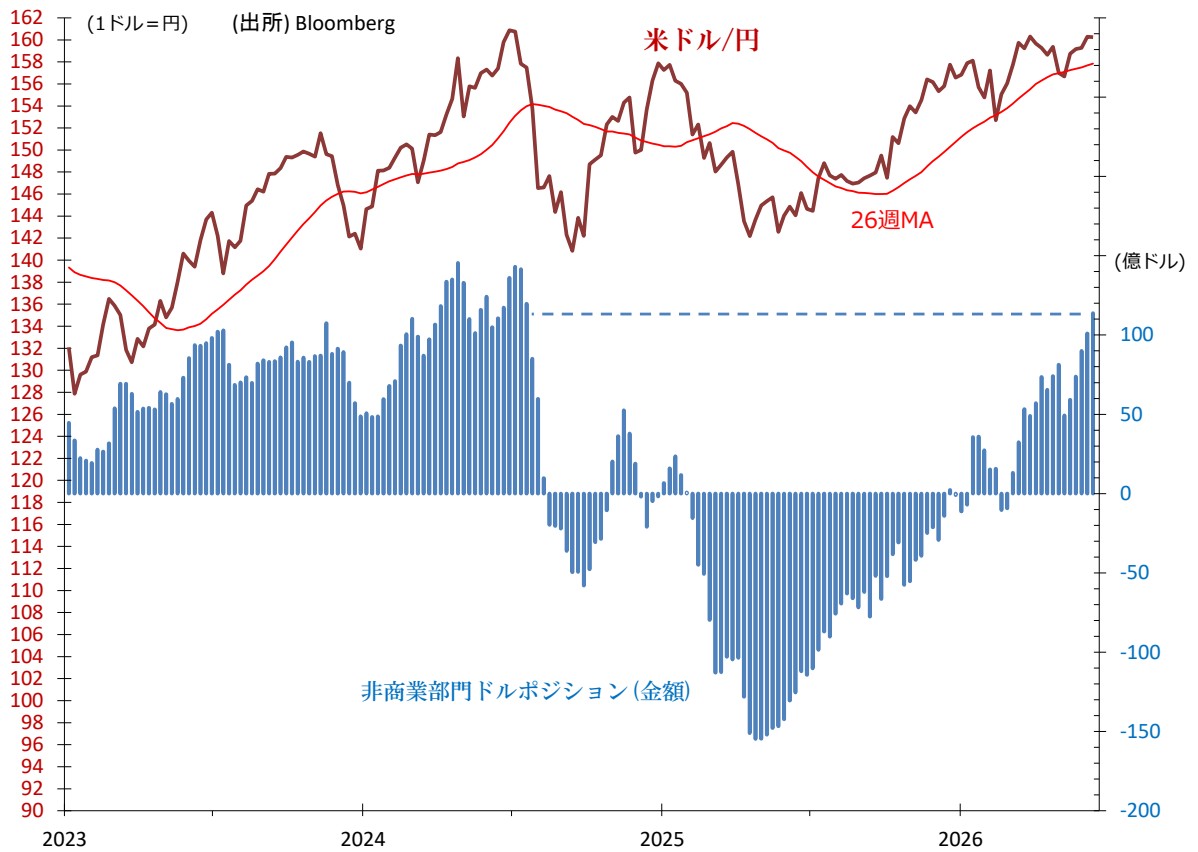
足元、日米実質金利差からのドル/円推計値は[142.859 円]です。

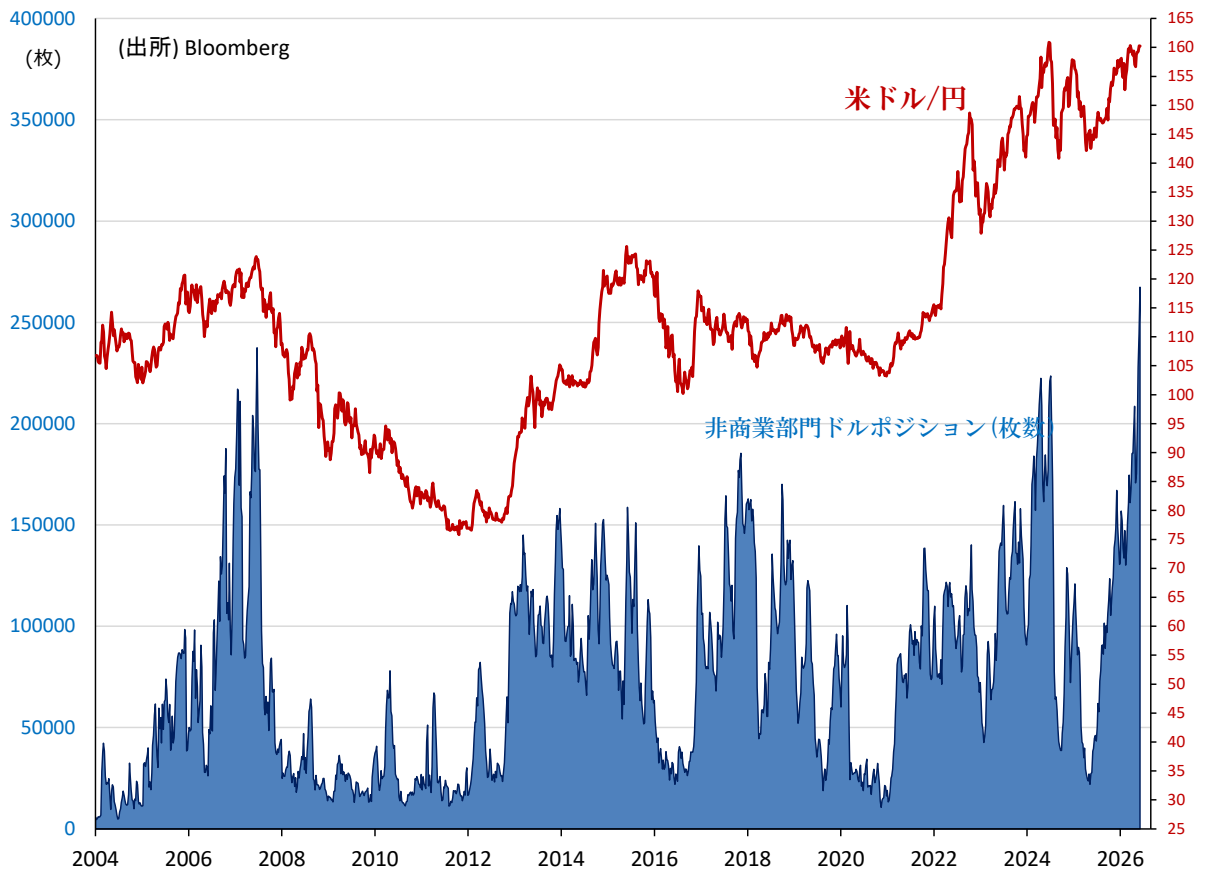
円売り持ち高が 3 週連続で拡大 (2026 年 6 月 9 日時点)

IMM 通貨先物市場において、投機筋(非商業部門)の円売り持ち高は、前週の 101.0 億ドルから 113.75 億ドルへ 5 週続けて拡大しました。円売り持ち高は、円買い介入が入ったときの水準(81.2 億ドル、4/28 時点)を既に大きく上回り、24 年 7 月以来の高水準です。

円売り枚数は過去最大を更新

投機筋の円売り持ち枚数は、6 月 9 日時点で 26.67 万枚と 2 週続けて過去最大となりました。円高へのマグマは溜まっています。





ドルインデックス (ドル指数)



【エリオット波動分析】

25年7月(96.377)からの(X)波は100.643(3/31)を以て終了しました。パターンは「エクспанディング(拡大)・トライアングル」です。

4月からはドル安トレンド(A-B-C)が展開中とみられ、このドル安は数年間に及ぶと思われます。

最初の下降波・第(i)波は97.632(4/17)で終わり、そこからは第(ii)波のリバウンドとみられます。第(ii)波はフラット(a)-(b)-(c)を形成し、それは終わりつつあります。

97.496を終値ベースで下回ると、第(iii)波によるドル安トレンド入りの可能性が高まります。ひとたび第(iii)波のドル安トレンドに入ると、ドル指数は今年中に95.551を明確に下回ると見られます。

その反面、100.643を超えると上記見通しはキャンセルされ、別の波動カウントに替える必要があります。



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できると思われる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもありますが、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差（スプレッド）があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4%以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率（為替リスク想定比率）を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率（為替リスク想定比率）は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10%です。

金融商品取引業 関東財務局長(金商)第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
